

〔10・オ〕

【翻刻本文】

帚木 〔割・以歌巻の名とせり〕

〔割・そのはらやふせ屋におふるはゝき木の／ありとは見えてあはぬ君かな 平貞文〕

〔割・源十六才。きりつほと此巻の間三年あり。其内に／藤つぼに密通ありたりと思ふべし〕

源は、藤つぼに御心ざしあれば、内にのみさぶらひよう
し給て、おほいどのには、たえ／＼まかで給ふ。〔割・あふひの上の／事也〕
なが雨はれまなき比、うちの御物いみさしつゞきて、
いとどながるさぶらひ給ふ。〔割・あふひの／兄〕頭中将は、中にしたしく、
あそびをもたはぶれをも心やすくふるまひたり。
此中将も、右のおとゞの〔傍・お＝四の君〕すみかは物うく、里にても我
かたのしつらひまばゆくして、源ともろ共にかぐ
もんをもあそびをも、おさ／＼たちをくれず、心の

【現代語訳】

帚木〔和歌の言葉から巻の名前を付けました〕

〔そのはらや ふせ屋におふる はゝき木の／ありとは見えて あはぬ君かな 平貞文〕

〔〈光源氏〉十六歳のときの話です。桐壺の巻とこの巻の間には三年間の空白があります。

その間に〈光源氏〉と〈藤壺〉とが不倫をしたと想像しましょう〕

〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことが好きなので、〈藤壺〉の住む宮殿でばかり過ごして
いて、妻がいる〈左大臣〉の家には、あまり行きません。〔割・妻とは〈葵の上〉のことです〕
長雨が続いて晴れることもないころ、宮殿の物忌みが引き続いて、
光源氏はいつもより長く宮殿にとどまっています。〈葵の上〉の兄である〈頭の中将〉は、特に親しく、
遊びも冗談も気楽にふるまっています。
この〈頭の中将〉も、〈右大臣〉の家（妻の〈四の君〉）が住んでいます。〈四の君〉は〈右大臣〉の娘です
は、おっくうな感じがして、自宅にいても自分の
部屋はまぶしいほどきれいにしています。〈頭の中将〉は〈光源氏〉と一緒に勉強
でも遊びでも、ほとんど負けることなく、お互いに心の

〔10・ウ〕

【翻刻本文】

うちにおもふ事かくしあへず、むつれ聞え給ふ。つれ
／＼と降くらししてしめやかなるよみの雨に、おほとなぶら
近くて文共〔傍・共＝文書也〕み給ふ。ちかきみづしなるいろ／＼の紙なる文
ども引出て、中将ゆかしがれば、「さりぬべき〔傍・さ＝源詞〕すこしは見
せん。かたわなるべきもこそ」と、ゆるし給ねば、「やんごとなく〔傍・や＝頭詞〕
せちにかくし給ふべきなどは、かやうのおほぞうなるみ

づしなどにちらし給ふべくもあらず、これは二のまちの
心やすきなるべし」とて、かたはしづゝ見るに、心あて
に「それか、かれか」ととふ中に、いひあつるもあり、もて
はなれたるも、をかしとおぼせど、ことずくなにて、
とかくまぎらはし給ふ。

【現代語訳】

中に思う事も隠さずに話して、親しくしています。一日中雨が降って
退屈な日の静かな夜に、灯火を
近づけて《本》などを見えています。《頭の中将》が近くの《戸棚》からさまざまな色の紙の《手紙》
などを出して、見たがっているの、《光源氏》は「差しさわりのないものなら少しだけ見
せよう。みっともないものがあつては困るからね」と、見せるのをしぶっていると、《頭の中将》が「特別で
人に見られてはならないような手紙などは、こうした戸棚に放って置く
わけもないのです。この見せた手紙は二流品で
遠慮がないような女のものなのでしょう」と、いくつもの手紙を少しずつ見て、でたらめに
「その女の手紙か、あの女の手紙か」と尋ねる中には、言い当てているものもあります。また、見当
違いな推測もあつて、《光源氏》はおもしろいなと思うけれど、言葉少なく、
いろいろとごまかします。

〔11・オ〕

〈絵1〉 五月雨の夜、宮殿で光源氏と頭中將とが、文を本棚から出して見ている場面

〔11・ウ〕

【翻刻本文】

「そなたに〔傍・そ＝源詞〕こそ、おほくつどへ給ふらめ。すこし見ばや。さて
なん、此づしも心よくひらくべき」と、の給へば、「御らんじ所〔傍・御＝頭詞〕
あらんこそかたく侍らめ」など聞え給ふつゝに、女の
しなをさだめ給へり。〔割・頭中將詞／初段〕「おやなどたちそひ、もて
あがめ、まどの内なる程は、かたかどを聞つたへて心をうご
かす事もあめり。はかなきすさびをも、人まねに
ひとつづへづけてしいづる事。をくれたるかたをば、いひかく
し、さて有ぬべきかたをば、つくろひていふに、それしか
あらじと、をしかはりてはいかゞ思ひください。まことか
見もてゆくに、見をとりせぬやうはなくなんあるべき」と、
うめき給へば、源も、おぼしあはする事やあらん、ほゝゑみて、

【現代語訳】

《光源氏》は「あなたのほうが、女性からの手紙をたくさん集めているのでしょうか。すこし見せてください。
そ
うしたら、この戸棚もこころよく開けましょう」と、言うので、《頭の中將》は「見せられるようなものは
あまりありませんよ」などと言ったついでに、女性の

格付けをすることになりました。まず〈頭の中将〉が「親などがいつもそばにいて、甘やかし、過保護であるうちは、良い噂をききつけて心ひかれる事もあるでしょう。ちょっとした芸でさえ、他人のまねをして練習すれば1つぐらいはうまくなることです。未熟なところは、隠して言わず、まずまず良いところは、とりつくろって言うのを、その話が嘘であると、どうして推測することができるでしょうか。その話が本当だと思って付き合ってみて、たいていはがっかりするものでしょう」と、ため息をついていますと、〈光源氏〉のほうでも、思い当たることがあるのでしょうか、ほほ笑んで、

〔12・オ〕

【翻刻本文】

〔割・二段〕「そのかたかどもなき人はあらんや」との給ふ。〔割・頭中／三段〕「とるかたなきとすぐれたるとは、かずひとしくこそ侍らめ。しなたく生れぬれば、人にかしづかれてかくるゝ事、じねんに其けはひこよなかるべし。中のしなになん、をのがじゝのたてたるおもむきもみえて、わかるべき事かた／＼おほかるべし」〔割・源詞／四段〕「もとのしなたく生れながら、身はしづみくらみみじかくて、人げなきと、又なを人の上達部までのぼりたるが、家の内をかざり、人にをとらじと思へる、其けぢめをばいかゞわくべき」左の馬のかみ、藤式部丞、御物いみにこもらんとて参れり。此しな／＼をさだめあらそふ。〔割・馬詞〕「なを人の

【現代語訳】

「その話のように1つもとりのない女性がいるのだろうか」と言います。〈頭の中将〉は「何のとりえもない女性と申し分のない女性とは、同じくらいまれでしょう。身分高く生まれれば、人々に大事にされて欠点が見えることもなく、しぜんとその雰囲気も格別になるのでしょうか。中流の女性のほうが、それぞれの性格や考えがはっきりしていて、ひとりひとりの個性がいろいろな面で多いでしょう」と言うと、〈光源氏〉は「もともと身分高く生まれたのに、落ちぶれて位も低く、人並みの暮らしもできないのと、また普通の身分の人が上流貴族にまで出世して、家を立派にして、誰にも負けないと思っているのと、その区別をどうやってつけたらいいのだろうか」と言っているところへ〈左馬の頭〉、〈藤式部の丞〉が、物忌みをするということでやってきました。この女性の格付けを議論します。〈左馬の頭〉は「普通の人が

〔12・ウ〕

【翻刻本文】

なりのぼりたるは、よの人の思ひなし、猶ことなり。又、もとはやんごとなきすぢなれど、おとろへぬれば、心は心としてことたらず、わろびたる事ども出つるわざ

なめれば、中のしなにぞをくべき。ずりやうの品さだ
まりたる中にも、またきざみ／＼ありて、えり出
つべきころほひなり。もとのねざしいやしからぬが、
やすらかに身をもてなし、家の内にたらぬ事な
かめるまゝに、はぶかずまばゆきまでもてかしづける
むすめなどの、おとしめがたくおひいづるもあるべし。
みやづかへに出たちて、思ひがけぬさいはひとりいづるも
おほかりかし」などいへば、〔割・源詞／二段〕「すべてにぎはゝしきによる

【現代語訳】

成り上がったとしても、世間の人は、やはりよくは思わないのです。また、
もともとは高貴な家柄なのだけれども、落ちぶれてしまえば、気位が高くても
生活できず、具合の悪いことが起きてくる
ようですから、こうした女性は中流とするのがよいでしょう。受領（地方の政治家）の娘という階層が
決まっている中にも、また細かい区分けがあって、その中から適当な女性を選び
出すことができるような時代です。ほどほどに血筋がよくて、
ゆったりと暮らし、生活に何不自由なく育ち、お金を惜しむことなく大事に可愛がられて育てられた
娘などが、欠点もなく成長していたりするのでしょう。
社会に出て仕事をして、思いがけない幸運をつかみ取ることも
多いですよ」などと言うと、〈光源氏〉は「結局、金持ちがいい

〔13・オ〕

【翻刻本文】

べきなんや」とて、わらひ給ふ。〔割・馬詞／三段〕「もとのしな、時代の
おぼえ打あひたるは、をくれたる事は、さらにもいはず。又、
すぐれたらんも、さるべき事とおぼえて、心もおどろく
まじ。かみがかみは、なにがしらがをよぶべき程ならず」
といふ。〔割・源詞〕「世にありと人にしられず、むぐらのかどに、
おもひのほかにはらうたげならん人の、とぢられたらん
こそ、めづらしくはおぼえぬ。」、〔割・四段〕「父のとしおひ、せうとの
かほにくげに、おもひやりことなる事なきねやの
内に、いといたく思ひあがり、はかなくしいでたることわ
ざも、ゆへなからず見えたらん、片かどにても、いかゞお
もひのほかにおかしからざらん。いでや、かみのしなとお

【現代語訳】

ということなんだね」と言って、笑います。〈左馬の頭〉は「もともと良い身分で、社会的
地位も兼ねそろっている家柄なのに、娘自身が劣っているのは、論外ですね。また、
そういった家柄であると娘自身が優れていても、当然なことと思われて、いまさら珍しいとも
思いません。上流家庭のさらに上流の女性については、私の手の届く範囲ではありませんね」
と言う。〈光源氏〉は「誰も知らないような、雑草がたくさん生えて荒れた家の中に、
思いがけず可愛らしい女性が寂しく暮らしていたら、

興味を持たずにはいられないでしょう」、そして「年老いた父親や、憎たらしい顔をしている兄弟がいて、たいしたことない部屋の奥に、たいそう誇り高くしている娘がいるのです。その娘がちょっとしたことをするにも、優雅に見えたりするのは、中途半端な才能であっても、思いがけず魅力があるというものでしょう。いやまあ、上流の女性でさえ

〔13・ウ〕

【翻刻本文】

もふにだにかたげなる世を」と、君はおぼす。しろき御ぞどものなよゝかなるに、なをしばかりをしどけなくきなし給て、そひふし給へる御ほかげ、いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。〔割・馬詞／五段〕「大かたの世につけて見るにはとがなきも、我ものとうちたのむべきをえらばん、おもひさだむまじかりける。

【現代語訳】

素晴らしい女性はいないものなのに」と、《光源氏》は思います。

〈光源氏〉は、着慣れてやわらかくなった《白い着物》に、《直衣という上着》だけを軽くはおっています。横になっている姿が《灯火》に照らされて、とても素敵で、

〈光源氏〉を女性にしたいくらいです。《左馬の頭》は「ある程度付き合ってみる分には問題がなくても、結婚相手として信頼できるような女性を選ぼうとすると、なかなか決められないものです。

〔14・オ〕

〈絵2〉 〈絵1〉のところへ、左馬頭と藤式部丞がやってきて、四人で女性の品定めをしている場面

〔14・ウ〕

【翻刻本文】

おのこのおほやけにつかうまつるにも、まことのうつはものとなるべきは、かたかるべし。かしこしとても、ひとりふたり、世中をまつりごちしるべきならねば、上は下にたすけられ、下は上になびきて、事ひろきにゆつろふらん。せばき家のあるじとすべき人ひとりをおもひめぐらすに、たらはであしかるべき大事どもなんかた／＼おほかる。人はたゞしなにもよろし、かたちをばさらにもいはず、いとくちおしくねぢけがましきおぼえだになくば、たゞひとへに物まめやかにしづかなる心のおもむきならんよるべをぞ、つゐのたのみ所には思ひをくべかりける。まだわらはに〔傍・＝馬〕

【現代語訳】

男性が働いていても、本当に優れた人物といえる人は、めったにいません。仕事ができるからといって、1人や2人で、世の中の政治を動かせるわけではないのですから、上司は部下に助けられて、部下は上司に従って、大きな仕事を協力しておこなうのでしょう。しかし狭い家の中に主婦は一人ですから、できないと困る大事なことなどが多いのです。女性の家柄なんてもうどうでもいいのです、見た目の良し悪しも関係ありません。つまらないひねくれた性格ではなくて、ただとにかく一途で落ち着いているような性格の女性を、一生つれそう奥さんとするのがよいのでしょう。まだ私（左馬の頭）が子供

〔15・オ〕

【翻刻本文】

侍し時、女ぼうなどの物がたりよみしを聞て、いと哀にかなしく、心ふかき事かなと涙をさへおとし侍し。いま思ふには、いとかるゝしき事也。心ざしふかからんおとこをゝきて、めのまへにつらき事ありとも、人の心を見しらぬやうににげかくれて、人をまどはし、心を見んとする程に、ながき世の物おもひになる、いとあぢきなき事也。『心ふかしや』などほめたてられてあはれすゝみぬれば、やがてあまになる。おとこきゝつけて、なみだおとせば、つかふ人、ふるごたちなどきて、『おとこの御心はあはれなる物を、あたら御身を』などいふに、くやしき事もおほかるに、仏も心ぎたなしと見

【現代語訳】

であったころ、女房たちが物語を読んできかせてくれて、その話がとてもかわいそうで悲しく、せつなくて涙まで落としました。

今思うと、これはとても軽々しいことでした。今がつらいからといって、愛情の深い夫を置いて家出をして、夫の気持ちを無視して、夫を慌てさせ、夫の本心を見ようとするばかりに、夫婦関係を壊して一生後悔しつづけるのは、本当につまらないことです。その女性が『深い考えだ』とか褒められて、その気になってしまえば、そのまま尼になってしまうものです。夫が聞きつけて、涙を落としたとしても、召使いや老女たちが『旦那さまの気持ちは愛情深かったのに、残念です』とかいって、悔しがってばかりいるので、仏様からも未練がましいと

〔15・ウ〕

【翻刻本文】

給ひつべし。心はうつろふかたありとも、見そめし心
ざしいとおしく思はゞ、さるかたのよすがにおもひても
有ぬべきに、さるやうならんたぢろぎに、絶ぬべき
わざ也。すべてよろづの事なだらかに、ゑんずべき
事はほのめかし、うらむべきふしをもにくからずかす
めなさば、それにつけてあはれもまさりぬべし。我心
も、見る人からおさまりもすべし。おとこの心は、つな
がぬ舟のうきたるためしも、げにあやなし。さは侍らぬ
か」といへば、中将うなづく。馬のかみ、物さだめのはかせ
に成てひゝらきゑたり。〔割・馬詞／八段〕「木のみちのたくみの、
よろづの物をつくり出すも、りんじのもてあそび物

【現代語訳】

思われてしまうでしょう。夫が浮気したとしても、最初のころの
気持ちを大事に思えば、一生一緒に生きていくことも
できるでしょうに、そういう心のすれ違いから、夫婦の仲も
切れてしまうのです。何でもどういったことでも冷静に、嫉妬は
夫の浮気を知っていると見せるぐらいにし、不満を言うにも可愛らしくやんわりと
いえば、それによって愛情が増すというものです。だいたい自分の浮気心も
妻の態度によって収まりもするのです。男性の心というのは、岸につないで
いない舟のようなもので（ふらふらとどこへ行くかわからず）、まったく理屈通りではありません。そう
ではありませんか」と言う、〈頭の中將〉はうなづく。〈左馬の頭〉は、この女性論の学者と
なって熱く話をしている。〈左馬の頭〉は「木工細工の職人が、
いろいろな物を作り出すのも、ちょっとしたあそび心で

〔16・オ〕

【翻刻本文】

のさだまらぬは、そばつきさればみたるも、いまめ
かしきにめうつりて、おかしきもあり。大事として、ま
ことにうるはしきてうどの、かざりとするやうある
物を、なんなくしいづる事、まことの物の上手は
さまことに見えわかれ侍る。又、ゑ所にも見をよばぬ
ほうらいの山、いかれるいをのすがた、から国のはげし
きけだものゝかたち、おにのかほなどのおどろ／＼しく
作りたる物は、じちには似ざらめど、さて有ぬべし。
よのつねの山のたゝずまひ、水のながれ、人の家
ゑ、げにと見え、心しらひをきてなどを、上手はいき
ほひことに、わろ物はをよばぬ所おほかめる。手をか

【現代語訳】

作る形式にこだわらない物は、見た目がしゃれていて、目新しいものもあって、格好いいものもあります。一方で大事なものとして、本当に様式どおりに美しく作った調度品の、飾りとするようなものを、完璧に作らせるときには、本物の職人の違いが見えてくるのです。また、画家でも見たことのない蓬萊の山や、恐ろしい魚の姿、唐国にいる荒々しいけものの形、鬼の顔などを気味悪く作った物は、実物には似ていないのだろうけれども、そういった想像で描いた絵もあるでしょう。本物の画家が、普通の山の姿や、水の流れ、人の家の様子を描くとなると、なるほどと納得させられ、描いてある物の配置などの心配りを、勢いよく描いていて、未熟な者はかなわないところが多いようです。文字を

〔16・ウ〕

【翻刻本文】

きたるにも、ふかき事はなくて、ここかしこのてんながにはしりかき、そこはかたなく気しきばめるは、打見るにかど／＼しく気しきだちたれど、まことのすぢにとりならべてみれば、猶じちになんよりける。はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の、時にあたりてけしきばめらん見るめのなさけをば、えたのむまじく思給へて侍る。其始の事、すき／＼しくとも申侍らん」とて、ちかくゐよれば、君もめさまし、中将もいみじくしんじて、つらつえをつきてむかひる給へり。

【現代語訳】

書くにも、深く考えずに、あちこち点のばして書くと、どことなく気取っているように見えて、ちょっと賢そうに見えますが、本物の書道家の書いた文字と比べてみると、やはり全然違います。ちょっとしたことですらこうなのです。まして人の心の、その時その時に見せるうわべだけの愛情は、信用できないと思うようになったのです。そのきっかけになったことを、好色なことですがお話いたしましょう」と言って、近くにはじり寄ると、《光源氏》も目を覚まし、《頭の中將》も大変本気になって、《ほおづえ》について向かい合って座っています。

〔17・オ〕

〈絵3〉 引き続き、四人が話をし、光源氏が頬づえをついている場面

[17・ウ]

【翻刻本文】

〔割・馬物語／九段〕「はやう、まだ下らうに侍し時、あはれと思ふ人侍りき。かたちなどまほにも侍らざりしかば、とまりにとも思侍らず、とかくまぎれ侍しを、ものえんじいたくし侍しかば、心づきなく、かゝらでおいらかならましかばと、うるさくおもひながら、数ならぬ身をなどかくしも思ふらんと、じねんに心おさめらるゝやうに侍し。此女、とかくにつけてものまめやかにうしろみ、心にたがふ事なくもがなとなびき、みにくきかたちを見やうとまれんとつくろひ、見なるゝまゝに心もけしうはあらず、たゞ此にくきかたひとつなん心おさめず侍し。いかでこる

【現代語訳】

〈左馬の頭〉は、「若いころ、まだ下級の身分であったときに、好きな人がいました。そんなに美人ではなかったのに、一生一緒にいる人だとも思わず、とにかくいい加減に付き合っていたら、とてもやきもちを焼くので、おもしろくなく、もう少しおだやかであればいいのにと、うるさく思っていました。しかし、つまらない私をどうしてここまで愛してくれるのかと思うと、自然と浮気心も収まっていました。この女は、いろいろなことにつけて熱心に世話をやき、私の希望どおりになるように従い、美しくない顔を見られて嫌われないようにと頑張って化粧をし、生活をしていくうちに性格も悪くはなかったのですが、ただこのひどく嫉妬をするという点だけが我慢ならなかったのです。どうにかして嫉妬心が

[18・オ]

【翻刻本文】

ばかりのわざしておどして、此かたもすこしよろしく成、さがなさもやめんと思ひて、なさけなくつれなきさまをみするに、えおさめぬすぢにて、およびひとつをひきよせてくひて侍しを、おどろ／＼しくかこちて、「かゝるきずさへつきぬれば、世をそむきぬべかめり」など、おどして「けふこそはかぎりなれ」と、をよびをかぞめて、
手をおりて あひ見し事を かぞふれば
これひとつやは 君がうきふし
〈女〉うきふしを こゝろひとつに かぞへきて
こや君がてを わかるべきおり
りんじの祭のでうがくに夜ふけて、雪打はらひ、こよ

【現代語訳】

なおるようなことをしておどかして、この悪いところも少しはよくなり、意地悪なところもなくなるだろうと思って、あえて冷たい態度をみせていましたら、とうとう我慢ならない様子で、この女は私の指一本をつかんで噛んだのです。私は大げさに文句を言って、「こんな傷をつけられたのでは、もう出家でもするしかないようだ」などと言って、おどして「今日で逢うのが最後だろう。さようなら」と、指を曲げながら、

手をおりて あひ見し事を かぞふれば

これひとつやは 君がうきふし

(と、歌を詠み、女が次のように歌を返しました)

〈指喰いの女〉

うきふしを こゝろひとつに かぞへきて

こや君がてを わかるべきおり

賀茂神社で行われる臨時の祭りの練習が夜ふけまでかかり、降りかかる雪を払っていますと、今夜

〔18・ウ〕

【翻刻本文】

み日ごろのうらみはとけなんと思給へしに、女ばう共ばかりゐて、『さうじみはおやの家にわたりぬる』とこたへ侍り。立田姫たなばたの手にもをとるまじく具して侍し。いと哀に思ひたり」と申す。「さて〔合点〕同じ比まかりかよひし所あり。心ばせまことにゆへありと見えぬべく、歌よみ、はしりがき、かいひくつまをと、手つき口つき、たど／＼しからず見るめ事もなく侍しかば、ゆびくひの女うせて後、しば／＼なるまゝに、まばゆくえんにこのましき事は、めにつかぬ所あるに、打たのむべくはみえず、かれ／＼に見するに、又しのびて心かよはす人ぞありけらし。神無月の比、

【現代語訳】

なら先日けんかした恨みもなくなって仲直りできるだろうと思ったのですが、彼女の家には女房たちしかいなくて、『本人は親の家に行きました』と答えるだけです。龍田姫や織姫のように染色とか裁縫が上手な女でしたのに。本当にかわいそうなことをしました」と言います。さて、同じころに逢っていた女がいました。心遣いがいかにも上品だと思われるように、歌を詠み、文字をさらさらと書き、楽器を奏でる音や、仕草や話し方まで、すばらしくて難がないといった女ですので、〈指喰いの女〉が死んだ後に、たくさん逢いに行っていました。こちらの女は派手で色っぽいところが、気に入らなくて、心を許せる妻とは思えなかったので、逢うことも途切れ途切れになると、他にこっそり付き合っている男ができたらしいのです。神無月（10月）のころ、

〔19・オ〕

【翻刻本文】

月おもしろき夜、内よりまかで待るに、あるうへ人、
此車にあひのりて、この人いふやう、『こよひ人待
らん。心ぐるし』とて、此女の家のあるたるくづれより、
池の水、月にやどるすみかをとて、おりて入ぬ。
もとより心かはせるにや、らうのすのこだつ物
にしりかけて、笛とり出てふきならず。内より
わごんをかきあはせたり。おとこ、菊をおりて、
『ことのねも きくもえならぬ やどながら〔傍・きく＝月〕
つれなき人を ひきやとめける
いま一こゑきゝはやす人のある時に、手なのこし
給ふそ』と、あざれかくなれば、女声つくろひて、

【現代語訳】

《月》がきれいな夜に、仕事から帰宅しようとする、《ある貴族》が、
一緒に車に乗ってきて、こう言うのです。『今夜は女が私（ある貴族）のことを待っている
らしいのです。気になるなあ』と言って、私（左馬の頭）と付き合っている女の家が荒れて壊れた塀から、
池の水面に、映る月がとても綺麗に見えました。私（左馬の頭）とこの男は車から降りて女の家の中庭に入り
ました。（この、ある貴族と〈左馬の頭〉とは同じ女と付き合っていたのでした）
以前から付き合っていて仲良くしていたのでしょうか、庭に面した縁側のようなところに
腰掛けて、《笛》を取り出して吹き鳴らします。《家の中の女》は
《和琴》という楽器を弾いて笛と合奏しています。男は、庭の菊を折って、
『ことのねも きくもえならぬ やどながら〔傍・きく＝月〕
つれなき人を ひきやとめける
（と、歌を詠み）もう一曲聞きたいと私が思うのだから、もっとあなたの音色を
聴かせてください』と、いやらしく言い寄ると、女は声をつくって、

〔19・ウ〕

【翻刻本文】

『こがらしに ふきあはすめる ふえのねを
ひきとゞむべき ことのはぞなき』
すきたはめらん女に心をかせ給へ。あやまち
して見ん人のため、かたくなゝる名をもたて
つべきものなり」と、いましむ。

【現代語訳】

『こがらしに ふきあはすめる ふえのねを
ひきとゞむべき ことのはぞなき』
（と、歌を詠んでいました。）あまりに色づ過ぎる女は注意したほうがいいですよ。失敗
すると、男のほうが悪い批判をうけてしまう
ものなのですから」と、忠告します。

〔20・オ〕

〈絵4〉 月がきれいな夜に、殿上人が、女性と合奏をしている場面

[21・ウ]

【翻刻本文】

〔割・頭中将〕「なにがしは、しれものゝ物語せん」とて、「忍びて見そめたりし人、おやもなく、心ぼそげにて、打たのめる気しきもらうたげ也。かくのどけきにをだしくて、まからざりしに、四の君より、うたてある事をいはせける。さりとも〔傍・＝頭は〕しらで、久しくせうそこもせず、おさなきものゝありしに、思ひわづらひて、なでしこの花をおこせたり〔割・此女、夕かほの上也〕

山がつの かきほあるとも おり／＼に

あはれはかけよ なでしこの露

〈頭中〉さきまじる 花はいづれと わかねども

なをとこなつに しくものぞなき

【現代語訳】

〈頭の中將〉は「私は、おろかな男の話をしましょう」と言って、「こっそり付き合い始めた人がいたのですが、その女は親もいなくて、か弱い感じで、放ってはおけない感じが可愛らしかったのです。そうして穏やかな交際をしていて、しばらく逢いに行かなかったときに、正妻である〈四の君〉が、この女にひどいことを言ったのです。私（頭の中將）はそのことを知らないで、そのまま長い間連絡もしないでいました。するとこの女は幼い子供もいたので、思いつめて、撫子の花に歌をつけて送ってきました。〔この女が、〈夕顔〉です〕

山がつの かきほあるとも おり／＼に

あはれはかけよ なでしこの露

（この〈夕顔〉の歌に対して、〈頭の中將〉は、次のように歌を返しました）

〈頭の中將〉

さきまじる 花はいづれと わかねども

なをとこなつに しくものぞなき

[22・オ]

【翻刻本文】

〈夕〉打はらふ 袖に露けき とこなつに

あらしふきそふ 秋もきにけり

〔割・此おさなき人／玉かづら也〕心やすくて、又とだえをき侍しに、あともなくこそうせにしか。まだ世にあらば、はかなき世にぞさすらふらん。いかで、此なでしこをたづねんとおもひながら、えきゝつけ侍らね」と、かたり給ふ。藤式部、「まだ文章のせうに侍し時、あるはかせのもとにがくもんなどし侍とて、かよひし程に、あるじのむすめにいひよりて侍しを、おやきゝつけて、盃

もて出て『ふたつの道うたふをきけ』となん、聞え
しかど、打とけてもまからず、其むすめを師と

【現代語訳】

(すると、〈夕顔〉はまた歌を返しました)

〈夕顔〉

打はらふ 袖に露けき とこなつに

あらしふきそふ 秋もきにけり

〔〈頭の中將〉と〈夕顔〉との間に生まれた「幼い子供」というのは、〈玉鬘〉です〕安心していて、またし
ばらく逢いに行かないうちに、跡形も

なく行方不明になってしまったのです。まだ生きているならば、大変な苦勞を
しながら暮らしていることでしょう。どうかして、この幼い子供をさがして
いるのですが、いまだ行方不明なのです」と、話します。

〈藤式部〉は、「まだ私が学生だったとき、ある博士の
ところで勉強をするということで、通っているうちに、先生の
娘に言い寄っていました。それを親である先生はきいて、盃を
持って来て『私が白楽天の婚礼の詩を謡うのを聞け』と、言います
けれど、私は結婚する気があまりなかったのです。しかし、その娘を先生と

〔22・ウ〕

【翻刻本文】

して、こしおれ文作る事などならひ侍しかば、
今にそのおんはわすれ侍らねど、さいしと打たの
まんに、無才の人、なまわろならんふるまひを見
えんにはづかしく、久しくまからで、物のたよりに
立より侍れば、つねのかたには侍らで、ものごしに
あひて侍しを、ふすぶるにやと思ふに、此さかし人、
世のだうりをおもひとりてうらみざりけり。

『月ごろ、ふびやうをもきにたへかねて、ごくねち
のさうやくをぶくして、くさきによりたいめん給
はらぬ。此香うせなん時に立より給へ』といふ。式部

さゝがにの ふるまひしるき 夕ぐれに

【現代語訳】

して、上手ではない漢詩なんかをその娘に習っておりましたので、
今ではその恩を忘れてはおりません。ただ、夫婦として生活
しておりますと、頭の悪い私は、不出来な人に
見えて格好悪くて、長い間逢いに行きませんでした。何かのついでに
訪ねましたのですが、いつものように気軽に逢うというのではなく、直接
顔も見せないのです。文句でも言うのかと思うと、この賢い女は、
恋愛感情というものをよく理解していて恨むこともしません。

『ここ数カ月、風邪が悪化してつらくて、熱の

薬草を服用しましたから、臭くて面会することは
できません。この香りがとれたところにまた来てくださいます』と言う。〈藤式部〉は歌を詠んだ。
さゝがにの ふるまひしるき 夕ぐれに

〔23・オ〕

【翻刻本文】

ひるますぐせと いふがあやなさ
あふ事の 夜をしへだてぬ 中ならば
ひるまもなにか まばゆからまし」

君たち「そらごと」とてわらひ給ふ。からうじてけふ
は日の気しきなをれり。かくのみこもりさぶらひ
給ふも、おほとのゝ御心いとおしければ、まかで給ふ。
内よりおほとのゝ御かたへは、長神ふたがりたれば、
いづかたにかたゝがへし給らんとあるに、紀のかみが
家、中川のわたり、此比、水せきいれて、すゝしき
かげときこゆ。きのかみにおほせ事給へば、「いよの
かみ、家につゝしむ事侍て、女房なんうつれる

【現代語訳】

ひるますぐせと いふがあやなさ

(この〈藤式部〉の歌に対して、女は次のように歌を返しました)

あふ事の 夜をしへだてぬ 中ならば
ひるまもなにか まばゆからまし」

(と〈藤式部〉が話すと)〈光源氏〉たちは「話をつくったね」と言って笑います。ようやく翌日は
天気も良くなって晴れました。〈光源氏〉はこんなふうには部屋の中にばかり
いたのでは、義理の父親の〈左大臣〉が寂しがって気の毒なので、〈左大臣〉の家へ行きます。
宮殿から〈左大臣〉の家への方角は、占いによると危険で良くない方角なので、
どこか別な場所へ行かなくてははいけません。すると〈紀伊の守〉という
中流貴族の家が良い方角で、中川の流れているあたりに、最近、川の水を庭の池に流し入れて、涼しい
ところだと言います。〈紀伊の守〉に〈光源氏〉が今夜泊まることを伝えると、「〈紀伊の守〉の父の〈伊予の
介〉も、理由があつてこの家に来ていて、家の女性たちも来ている

〔23・ウ〕

【翻刻本文】

比にて、せばき所に侍ればいかゞ」と申す。「その人〔傍・その＝源詞〕近なる
所こそうれしかるべけれ」とて俄におはしたり。水の心
ばへおかしく、柴垣などして、虫の声、螢しげし。わた
どのより出たるいづみにのぞみて人々酒のむ。この西
おもてに女の声聞ゆるを、立きゝ給へば、式部卿官の
姫君へ源より、あさがほ奉り給し歌などの事を
いふ。あるじの子共あまたある中に、十二、三ばかり

なるあり。「是は、いよのすけが女ぼうの弟なるが、ちゝなく成て後、此あねにかゝりてゐたる也。殿上なども思ひかけながら、えまじらひ侍らず」と申す。此子にあねの事、とひきゝ給ふ。人々は皆、ゑひふしぬ。

【現代語訳】

ころですから、家の中が狭くても大丈夫でしょうか」と言う。《光源氏》は「そういうふうには人がたくさんいるほうが楽しいじゃないか」と言ってすぐに《〈紀伊の守〉の家》にやってきた。《庭の水》の流れぐあいと素晴らしく、田舎風に作った垣があって、虫の声や、蛍が多い。渡り廊下のあたりから湧き出た泉を見ながらみんなでお酒を飲みます。この家の西側の部屋に《女性》の声がするのを、《立ち聞き》しますと、〈光源氏〉が〈式部卿宮〉のお姫様へ、朝顔の花につけて送った歌のことなどを話しています。主人の〈紀伊の守〉のたくさんいる子供の中には、12、3歳ぐらいの子もいました。「この子は、〈伊予の介〉の妻の弟なのですが、父親を亡くしてから、姉を頼ってここにいます。宮殿でお勤めさせたいと思っておりますが、なかなかできません」と言います。〈光源氏〉はこの子にお姉さんのことを、聞いてみたりします。人々は皆、酔って寝てしまいました。

〔24・オ〕

〈絵5〉 品定め翌日、紀伊の守の家で、方違えに来た光源氏が、女性たちの話す声を聞いている場面

〔24・ウ〕

【翻刻本文】

源はとけてもねられず、北のさうじのあなたに、あねの声して、此子に、「まらうどはね給ひぬるか」とゝふ也。
「中将の君は、〔傍・＝女の詞〕いづくにぞ。人げどをし」といへば、なげしものしにも、人々ふしていらへす。「ゆに入て、たゞ今奉らん」といふも聞ゆ。源は、しやうじのかけがねをこゝろみに引あげ給へば、あなたよりはさゝざりけり。火はほのぐらきに、みだれがはしきからびつだつ物の中をわけ入給へば、いとさゝやかにてふしたり。うへなるきぬ、をしやるまで、女は中将の君かと思へり。「人しれぬ〔傍・源詞〕おもひをかけて」との給ふに、おどろきたるをかきいだきて、さうじのもとに出給ふに、中将の君きて〔傍・＝女ぼうたち〕、「こは

【現代語訳】

〈光源氏〉が全然寝られずにいますと、北側のふすま越しに、姉の声で、この子に、「お客様はもう寝ましたか」ときいています。姉は「〈中将の君〉は、どこにいますか。誰か近くに来てくれませんか」と言うので、下の部屋から、女房たちが寝ながら返事をする。「お風呂に入っていますので、今行きますよ」という声も聞こえます。〈光源氏〉は、ふすまをためしに開けてみると、向こうから鍵はかけられていませんでした。部屋の照明は少し

暗くて、無雑作に置いてある衣装箱のようなもの間を
すり抜けると、とてもきゃしゃな様子で横になっています。女がかぶっている着物を、
〈光源氏〉が取り除くまで、この姉は〈中将の君〉が来たのだと思っていました。〈光源氏〉が「心の中で
は
好きでいたのです」と言うと、びっくりしている姉を抱き上げて
ふすまのところまで出ていこうとすると、ちょうど〈中将の君〉という女房などがやって来て、「これは

〔25・オ〕

【翻刻本文】

あさまし」と見奉り、なみ／＼の人ならば、ひきも
かなぐらめ、あまたの人のしらんはいかゞと、心さはぐ
に、おくなるおましにいだきて入給ぬ。鳥もなき、人々
もおきさはげば、中将の君、奉りてかくと申す。源、
つれなきを うらみもはてぬ しのゝめに
とりあへぬまで おどろかすらん
女は此ありさま、「いよのすけが、夢にやみゆらん」と、空
をそろしくて
身のうさを なげくにあかで あくる夜も
とりかさねてぞ ねもなかれぬる
月は有明なるに、西おもてのかうしより人々のぞ

【現代語訳】

大変だわ」と思う。〈中将の君〉は相手が平凡な男なら、力づくで
引き離そうと思いますが、たくさんの人々にこのことが知られるのもまずいのでどうしようかと、混乱して
いると、〈光源氏〉は奥にある部屋へ姉を抱いたまま入ってしまいました。朝になって鳥も鳴き、家の人々も
起きて動き出し始めました。〈中将の君〉は、家の人々が起き出したことを〈光源氏〉に伝えます。〈光源氏〉
は、

つれなきを うらみもはてぬ しのゝめに
とりあへぬまで おどろかすらん

（と、歌を詠みました。この女（〈空蟬〉といいます）はこの一夜のことを、「夫の〈伊予の介〉が、夢の中
で見て気付いてしまうのではないかと、
おそろしい気持ちになって、

身のうさを なげくにあかで あくる夜も
とりかさねてぞ ねもなかれぬる

（と、歌を詠みました）夜が明けても月はまだ西の空に残っていて、この家の女たちが西側の部屋の窓から
見ている。

〔25・ウ〕

【翻刻本文】

く。源は、かへりみがちにて出給ふ。左大臣殿へかへり
給ても、まどろまれ給はず。彼人の〔傍・＝空〕思ふらん心の中
おもひやり給へり。きのかみ奉たるに、「彼小君はえ

させてんや」との給て、めしよせ、なつかしくかたらひ給ふ。
わらべ心ちにうれしと思ふ。あねの事もよくいひ
きかせて、御文を此子につかはし給ふ。

見しゆめを あふ夜ありやと なげくまに

めさへあはでぞ ころもへにける

又の日、小君をめせば、あねに「御返事は」とこふ。「『かゝる〔傍・＝あね詞〕
御文みるべき人もなし』と申せ」といふ。「いかゞさやう
には申さん」といへど、返しはなし。きのかみも此まゝ母を

【現代語訳】

〈光源氏〉は、振り向きながら奥の部屋から出ていきます。〈左大臣〉の家へ帰って
来ても、〈光源氏〉は全然眠くなりません。あの〈空蟬〉は自分のことをどう思っているのだろう、心の中
が

知りたいなと〈光源氏〉は考えています。〈光源氏〉は〈紀伊の守〉を呼んで、「あの〈小君〉（〈空蟬〉
の弟）の

世話をさせてはくれまいか」と言って、自分の近くにいさせて、仲良く話かけたりしています。

〈小君〉も子供心に嬉しく思っています。〈光源氏〉はお姉さんとのことを〈小君〉によく言い
聞かせて、〈空蟬〉への手紙をこの子に渡します。

見しゆめを あふ夜ありやと なげくまに

めさへあはでぞ ころもへにける

（手紙には、このような歌が書いてありました）

翌日、〈光源氏〉が〈小君〉を呼び出して話を聞く。〈小君〉が姉に「手紙の返事を書いて」とお願いしま
す。すると姉は〈小君〉に「『このような

手紙を見る人はここにはいません』と〈光源氏〉に伝えなさい」と言います。〈小君〉は「そんな
ふうな返事を〈光源氏〉には言えませんが」と言ったけれど、返事はもらえませんでした。〈紀伊の守〉もこ
の継母にあたる〈空蟬〉のことが

〔26・オ〕

【翻刻本文】

おもひかけて、ついせうし、此子をもかしづきけり。「きのふ〔傍・き＝源〕
の返事はなきか」ととひ給ふに、しか／＼と申す。「いよの〔傍・い＝源詞〕
すけよりも、我はさきにあひみし中也」と、此子に
いつはりて、此文はつねにあり。されど、打とけたる御
いらへもなし。又、物いみの比、彼家におはしたり。女
君には、「ひるよりかく」との給ふに、有し夜の夢を
又やくはへんと、おもひみだれ、待奉らんも、まばゆ
くなやましきに、こしを打たゝかせんとて、中将
といひしものゝつぼねにうつろひぬ。源は、人とか
しづめて、御せうそこあれど、小君え尋ねあはず。
からうじてもとめきたり。「いかにかひなし」となく

【現代語訳】

好きだったので、〈空蟬〉に気に入られようとして、この弟の〈小君〉も大事にしています。〈光源氏〉は「昨日の返事はまだかい」とたずねると、〈小君〉はこうこうだと話します。〈光源氏〉は「〈伊予の介〉よりも、先に私はお姉さんと知り合っている仲なのだよ」と、この子に嘘を言って、〈光源氏〉はいつも〈小君〉に姉への手紙を渡す。しかし、心を許した〈空蟬〉からの返事ありません。そうしてまた、物忌みがあるころ、あの〈紀伊の守〉の家に行きました。〈空蟬〉には、「昼から行きます」と伝えてあるので、〈空蟬〉はあの日の夜の夢のようなあやまちをまたくりかえすのではないだろうか、困って冷静ではいられなくて、〈光源氏〉を待っているのも、恥ずかしくて混乱しているので、腰をもんでもらうというのを口実にして、〈中将〉という女房の部屋に移動しました。〈光源氏〉は、さっさと皆を寝させて、前に〈小君〉に手紙で指示を出しておいたのだけれども、〈小君〉はなかなか姉を探し出すことができません。ようやく見つけることができました。〈小君〉が「私が使えないやつだと思われてしまいます」と泣きだす

[26・ウ]

【翻刻本文】

ばかりいへば、「おさなきものゝ〔傍・お＝空詞〕、かゝる事はいはぬ物ぞ」といひおどし、『心地なやましくて、あたりに人をはなさずをさへさせて』となん申せ」といひはなちて心のうちには、いかに程しらぬやうにおぼすらんと、思ひみだる。源は、小君を待ちふし給へるに、かくと申せば、めづらかなる心の程を、身もはづかしくうしとおぼして、

はゞきゞの こゝろをしらで そのはらの
みちにあやなく まどひぬるかな

女も、さすがまどろまれざりけり。

かずならぬ ふせ屋におふる 名のうさに

【現代語訳】

くらいに言うので、〈空蟬〉は「幼い子は、そんなことを言うものではありませんよ」と叱り、「〈光源氏〉に『体調が悪いので、女房のそばでマッサージしてもらっています』と伝えなさい」と強く言って心の中では、〈光源氏〉に嫌な女だと思われるだろうと、悲しくて仕方がありません。〈光源氏〉は、横になりながら〈小君〉を待っていて、〈小君〉がこうですと言うと、珍しいほどの心の強さであると思い、恥ずかしくせつなく感じて、

はゞきゞの こゝろをしらで そのはらの
みちにあやなく まどひぬるかな

(と、歌を詠みました) 〈空蟬〉のほうも、〈光源氏〉を拒絶したのだけれども眠れないでいました。

(そして、次のように歌を詠みました)

かずならぬ ふせ屋におふる 名のうさに

[27・オ]

【翻刻本文】

あるにもあらず きゆるはゝきゞ

小君は、ねぶたくもあらでまどひありくを、人々
あやしとみるらんと、わび給ふ。「其かくれゐたる所
につれていけ」とのたまへば、「人あまた侍れば、いか
でか」と申す。

【現代語訳】

あるにもあらず きゆるはゝきゞ

〈小君〉が、眠ることもしないで〈光源氏〉の様子を気にしているのを、皆が
変だと思わないか、〈空蝉〉は心配しています。〈光源氏〉は「〈空蝉〉が隠れているその場所へ
連れて行け」と言いますが、〈小君〉は「人がたくさんいるところですから、どうやっても
（無理です）」と言います。